

# 第1章 豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像

田中 裕介

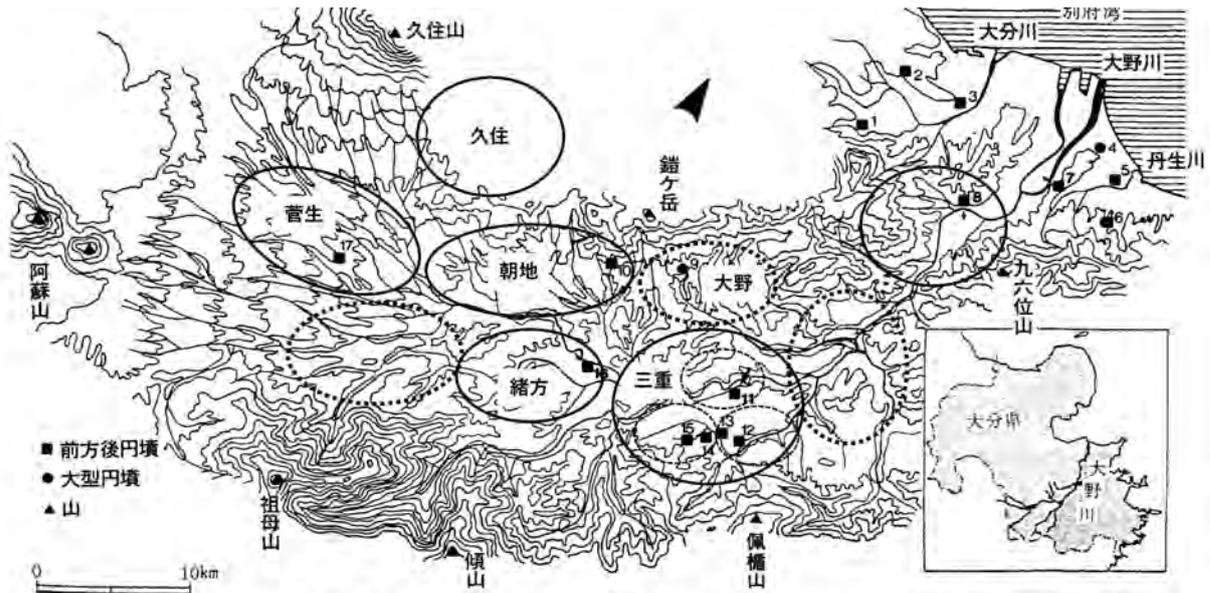
(別府大学)

## はじめに

筆者が所属する別府大学考古学教室では毎年冬の集中講義期間に発掘調査実習を行っている。2012（平成24）年度から2016（平成28）年度までは豊後大野市朝地町所在の漆生古墳群を、2017（平成29）年度からは同市三重町所在の重政古墳を調査した。これらの調査は豊後大野市内の大型古墳群の保護を目的とする市教委の重要遺跡範囲確認調査の一環であり、同時に科研費の研究目的に沿った調査でもある。漆生古墳群は墳長36mの1基の前方後円墳と3基の小古墳、さらに古墳群の立地する丘陵斜面には横穴墓群をとまっていた。重政古墳は50m級の前方後円墳である。

現在豊後大野市内には前方後円墳が8基、30m級の大型円墳が3基知られているほか、箱形石棺や、舟形石棺を主体部とする「小古墳群」が各所に分布する。集落に密接にかかわる集団墓地や「区画墓群」<sup>(1)</sup>も知られるようになった(図1)。なかでも墳長74mの前方後円墳道ノ上古墳をはじめとして、秋葉鬼塚古墳、重政古墳、小坂大塚古墳、竜ヶ鼻古墳が集中する三重盆地は、宇佐市川辺高森古墳群に匹敵する大分県内でも1、2の前方後円墳の集中地帯である。

発掘調査の目的は漆生古墳群の首長墓系譜を復元し、三重盆地の古墳群の首長墓系譜との関係を明らかにすることにあつた。ところが調査が進行するにつれ、大型古墳は必ずしも系譜的築造ではないことが判明して、かえって首長墓系譜の議論に疑問を投げかけることになった。本稿ではその経緯を述べて、豊後大野市内の前方後円墳群の調査成果を紹介し、あわせて大分県南部の古墳時代の首長像を論じたい。



1、御陵古墳 2、蓬来山古墳 3、大臣塚古墳 4、大在古墳 5、亀塚古墳・小亀塚古墳 6、上ノ坊古墳 7、野間1～3号古墳 8、小牧山6号墳 9、御塚古墳 10、坊ノ原古墳 11、立野古墳 12、小坂大塚古墳 13、道ノ上古墳 14、重政古墳 15、秋葉鬼塚古墳 16、大久保1号墳 17、七ツ森古墳群

図1 大野川流域の古墳群と政治領域

## 1 大野川中流域の古墳群研究史

熊本県阿蘇の外輪山と大分県南部を源流にして別府湾にそそぐ大野川は、その支流に多くの盆地や解析谷を生み出す一方、広範な凝灰岩台地をのこしてきた。畑作に適した台地上に弥生時代の集落が数多く立地するのに対し、古墳時代の集落は盆地や解析谷に立地するようになる。

**最初の報告** このような地形の大野川の中上流域に墳長 50 m を計る大型の前方後円墳が存在することは 1920 年代に大正時代の「大分県史跡名勝天然記念物調査委員会」の調査などですでに知られていた〔本庄・前田 1924〕。そのとき前方後円墳として報告されたのは重政古墳、小坂大塚古墳、道ノ上古墳の 3 基であった。しかし各古墳の内容と年代が知られるようになるのは比較的最近のことである。

**新たな発見** 1971（昭和 46）年に道ノ上古墳の平板測量が行われた〔清水・田中 1998〕。初めての測量調査である。1975 年ごろには三重盆地以北の広大な大野原の土地改良事業に伴う大分県教委の分布調査によって大野町の平井川水系に 40 m 級の前方後円墳である坊ノ原古墳と、茜川水系に 30 m 級の大型円墳御塚古墳が発見され、それぞれ測量調査がおこなわれている〔清水 1977, 清水・牧尾 1980〕。この分布調査で秋葉鬼塚古墳と竜ヶ鼻古墳が前方後円墳と指摘された。大野川中流域の狭隘な谷底平野の水田と周辺台地を単位とする地域にそれぞれ古墳群が確認され、前方後円墳が 4 基集中する三重盆地と、各 1 基の大型古墳が存在する大野町域の平井川流域と茜川流域の単位地域の性格の違いが問題となった。三重盆地という比較的狭い範囲に前方後円墳が集中する点について、80 年代にはつぎのような見解が出された。

**清水宗昭の総括**〔清水 1980〕 1970 年代に道ノ上古墳と坊ノ原古墳の測量調査を主導した清水宗昭は報告書『大野原の遺跡』のなかで、大野原地域の坊ノ原古墳と御塚古墳について「この両者は、それぞれ大野原台地を二分する平井川・茜川水系の奥津城ともいふべき位置にあり、二つの水系の水田農耕を基盤とした集落を地域的に統合した政治権力の象徴」〔p. 228〕と解し、この二つの単位地域がたどった歴史過程は周辺の三重盆地・緒方盆地・奥嶽川流域・朝地盆地、野津川流域などでも同じであると想定し、「その中で、特に三重盆地は、大型の前方後円墳が集中する地域であり、このことは古墳時代中後期の段階で、これらの各単位地域で権力を集中しえた中小の首長群を、大野川中流域（大野郡）という大きな地域単位で統合した極相を示すのではないか」〔p. 228〕と、数か所のそれぞれ大型古墳を築造しえた単位地域を広域に統合する首長権が三重盆地に集中的に成立したと考えた。

**後藤宗俊の評価**〔後藤 1982〕 古墳群の分布と地域集団の関心に焦点をあてて大分川下流域と海部地域の首長墳の研究をおこなっていた後藤〔後藤 1974a・1974b〕は、そこでの検討結果を大分県下の古墳群に敷衍して、古墳群のよってたつ基盤は小河川の流域が本拠地で、大野川中流の三重地区の古墳群もせいぜいその本拠地は三重盆地の内に限られるとのべ、県内の古墳群に共通する「この事実は、前方後円墳の外見上の大きさにもかかわらず、その被葬者としての首長が直接に掌握した地域は、意外と小さいことをしめしている。首長権の実体を、農業生産活動の掌握とその収穫の定期的な収奪、徭役の賦課や、共同体祭祀の主管といったところまで考える限り、これら首長の権力のおよぶ範囲は、令制下の「郡」より小さく、むしろ「郷」に対比しうるような範囲にとどまっていた」〔p. 42〕と考えた。清水の見解とは相対立する見解であった。

**玉永光洋の総括**〔玉永 1987〕 三重盆地の古墳時代の考古資料を総括する中で、竜ヶ鼻古墳を新たに前方後円墳と記載し、県教委が 1971（昭和 46）年に作成した道ノ上古墳の測量図を公表したうえで、小盆地に 5 基もの前方後円墳が集中するのは、大分県内でも宇佐市川部高森古墳群や海部の古墳群にも匹敵することを指摘した。そのうえで築造年代を推定する手掛かりがないとしたが、5 基の古墳は墳形から古墳時代前期後半から中期にかけて、前方部が発達する方向で、小坂大塚古墳・道ノ上古墳→重政古墳→秋葉鬼塚古墳・竜ヶ鼻古墳という変遷観をしめし、古墳は順次造られて首長権が時間的に移動したこと、つまり、三重盆地

内において首長権が継承されたと推定した。また三重盆地の前方後円墳の出現の背景としては、周辺地域にくらべて特に農業生産力が卓越していたとは考えられないとして、弥生時代以来の内的発展のみでは理解できず、交通・交易の要衝地の地方豪族に対し大和政権が政治的同盟を求めた結果という論述をおこなった。大野川中流域の政治構造については後藤の見解を踏襲したうえで、どうして三重盆地の首長が大和王権と政治的同盟を結ぶことができたのかという問題を提起した。交通の要地という視点を提示したと編年研究の萌芽があった点は評価すべきだが、この時点ではまだ墳形による現地観察のみからの推測にとどまり、墳丘測量図も整備されておらず、埴輪や土師器、副葬品など実証的な研究をおこなう材料も少なかった。

**古墳の発見と測量調査の進展** 以後、80年代までの資料の少なさを克服するため三重盆地を中心とする豊後大野の古墳群に対する研究は、分布調査と編年研究のための資料収集を中心に積極的に行われていく。1988（昭和63）年、清水宗昭による立野古墳の発見は、三重盆地からやや離れた大野川本流に面して前方後円墳が築造されていたことを明らかにした。直後にこの立野古墳、ひきつづいて秋葉鬼塚古墳と重政古墳の測量が諸岡郁によっておこなわれて、はじめて立野古墳の埴輪が紹介された〔諸岡1990〕。諸岡はさらに1994（平成6）年には重政古墳から出土した壺形埴輪を紹介し、その時期を中期初頭と推定し、はじめて遺物から古墳に年代を与え〔諸岡1994・1997〕、さらに重政古墳と秋葉鬼塚古墳の詳細な測量をおこなった〔諸岡1995〕。

こうした機運を受けて大分県教委は1996（平成8）年には立野古墳の墳丘測量調査と規模確認のための発掘調査をおこない、翌年小坂大塚古墳の測量調査をおこなった。立野古墳の調査では古墳時代前期の円筒埴輪と壺形埴輪が出土した。同時に諸岡により秋葉鬼塚古墳の測量調査がおこなわれ、この地域の前方後円墳を検討するための基礎資料が整った。1998（平成10）年には県調査の報告書が刊行され〔田中編1998〕、次の点を指摘した。①立野古墳は墳丘形態と円筒埴輪から前期後半に築造されたと考えられる。②墳丘形態から秋葉鬼塚古墳が前期前半に溯る可能性が指摘される。③中期初頭の重政古墳を最新として、ほかの4古墳はいずれも古墳時代前期にさかのぼると考えられた。④古墳群は3つの水系に立地がわかれ、首長系譜としては3系にわかれる可能性があること、⑤築造の背景は河川交通の要衝地であることなどが指摘された。その際筆者が提示した編年案が図2である。

同じ年に諸岡は竜ヶ鼻古墳の測量と発掘調査を行い、円筒埴輪を発見して前方後円墳であることを確かめた。この円筒埴輪にはB種ヨコハケが用いられて、中期後半に下る古墳であることが明らかになった〔諸岡2000〕。さらに翌年には道ノ上古墳の測量と発掘調査を行い、壺形埴輪と円筒埴輪を確認し、築造の年代が中期前葉まで下ることを明らかにした〔諸岡2002〕。この道ノ上古墳の調査成果は意外なものであった。墳丘形態から前期の後半と考えていた築造時期が中期前葉まで下ることが判明し、秋葉鬼塚古墳→道ノ上古墳→重政古墳という大型古墳の系列的築造という考えに疑問が投げかけられた。

その後、筆者が2009（平成21）年に三重地区の古墳群を、埴輪

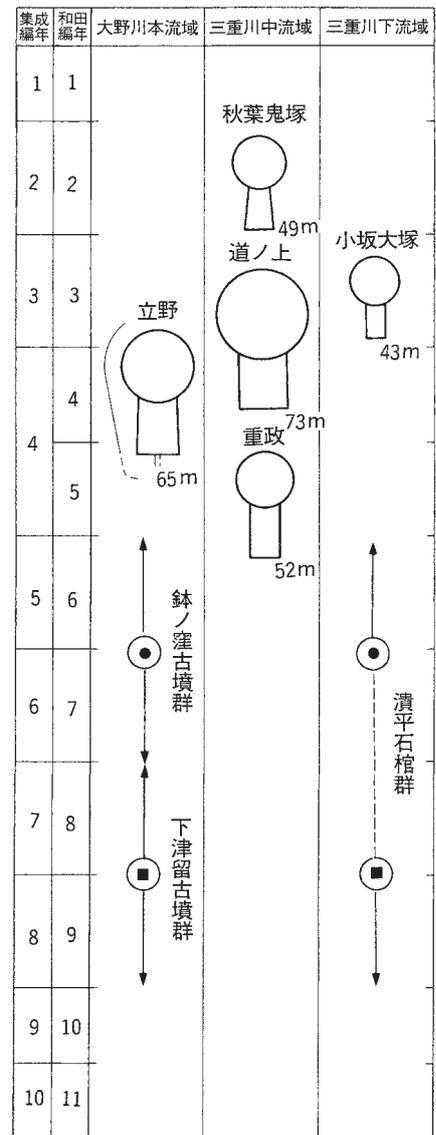


図2 1998年段階の編年表

		三重地域			
		大野川流域		三重低地(三重川流域)	
古墳時代		上原地区	市場地区	内田地区	小坂地区
前期	前半		秋葉鬼塚		
	後半	立野 立野古墳群			小坂大塚
中期	前半	鉢の窪古墳群	重政	道ノ上	清平古墳群
	後半	下津留古墳群	竜ヶ鼻	内田古墳群	

図3 2009年段階の三重の古墳編年表

と墳丘形態をもとに新たに編年したのが図3である[田中2009]。三重地区には前方後円墳の築造主体となりうる集団が4区域あり、各区域で小古墳による首長墓系譜がたどれ、特定の時期に輪番的に前方後円墳を築造するとした。しかし重政古墳と道ノ上古墳のようにほとんど同時期に造られた前方後円墳が存在することから、首長墓系譜は単純なものではないこと、前方後円墳が造られない時期があることなどを指摘した。

しかし筆者自身の反省でもあるが大型古墳の年代決定と首長墓系譜の復元という発想に終始し、清水と後藤によって提起されていた大野郡域の古墳

群の権力構造の観点はあまり顧みなかった。そのうえ調査とその総括を繰り返すたびに、資料の増加によって年代推定の誤りがあきらかになり、一地域の首長墓と考えられる前方後円墳を首長墓系譜として復元することに困難を感じるようになった。そういうおりに2012（平成24）年度から豊後大野市では大型古墳群の確認調査が始まり、別府大学も各古墳の測量調査と漆生古墳群の発掘調査を中心に参画した。途中経過ながら調査の成果を整理し、そこから見えてきたこの地域の古墳時代の政治構造を考えてみたい。

## 2 漆生古墳群の発掘成果

**調査前の想定** 豊後大野市緒方町に所在する漆生古墳群の調査をスケッチしてみよう（図4）。この古墳群は大正時代に城山古墳において石棺材が発見されたことにはじまり、同じころ「大久保古墳の石棺」と城山横穴墓群も発見された[日名子1929]。1992（平成4）年に新たに発見された大久保1号墳が前方後円墳と判明し、石棺蓋の所在する地点は大久保2号墳とされた。この調査によって横穴墓群をのぞいて、前方後円墳1基、円墳らしき小古墳2基が同じ丘陵のひとつならびに造られていたが、年代を決定する手掛かりは、前方後円墳の墳形と、舟形石棺と箱形石棺の石材という資料しかなかった。その際に筆者が作った編年表が図5である[神田ほか1993]。すべての古墳を古墳時代中期に並べた根拠はいま思えば極めて薄弱である。背景にあるのは一つの古墳群は系列的に時期を異にして造られているに違いないという前提であり、そういう風に並べるために最もありそうな比較を行っていたのである。この古墳群が出身集団の墓地から分離して古墳群を形成している可能性は高く、緒方盆地あるいは漆生の小平野などを背景とする首長墳と考えていた。2012（平成24）年から2017（平成29）年まで行った調査の結果はどうなったか。以上の想定がどのように変わったか要約してみよう[豊後大野市発掘調査概報4～8：2014～2018]。

**調査結果** 2012（平成23）年の第1次調査によって主体部を発見した大久保3号墳をふくめて漆生古墳群は4基の古墳と横穴墓群からなることが明らかになった。古墳数は1基増加した。

大久保1号墳は前方部前端がやや開く長さ36m強と判明し、柄鏡型という表現は修正を迫られた。全面に葺石をもち、平坦面には玉砂利をしいていた。埴輪の類は一切なく、わずかな土師器の破片から前期後半

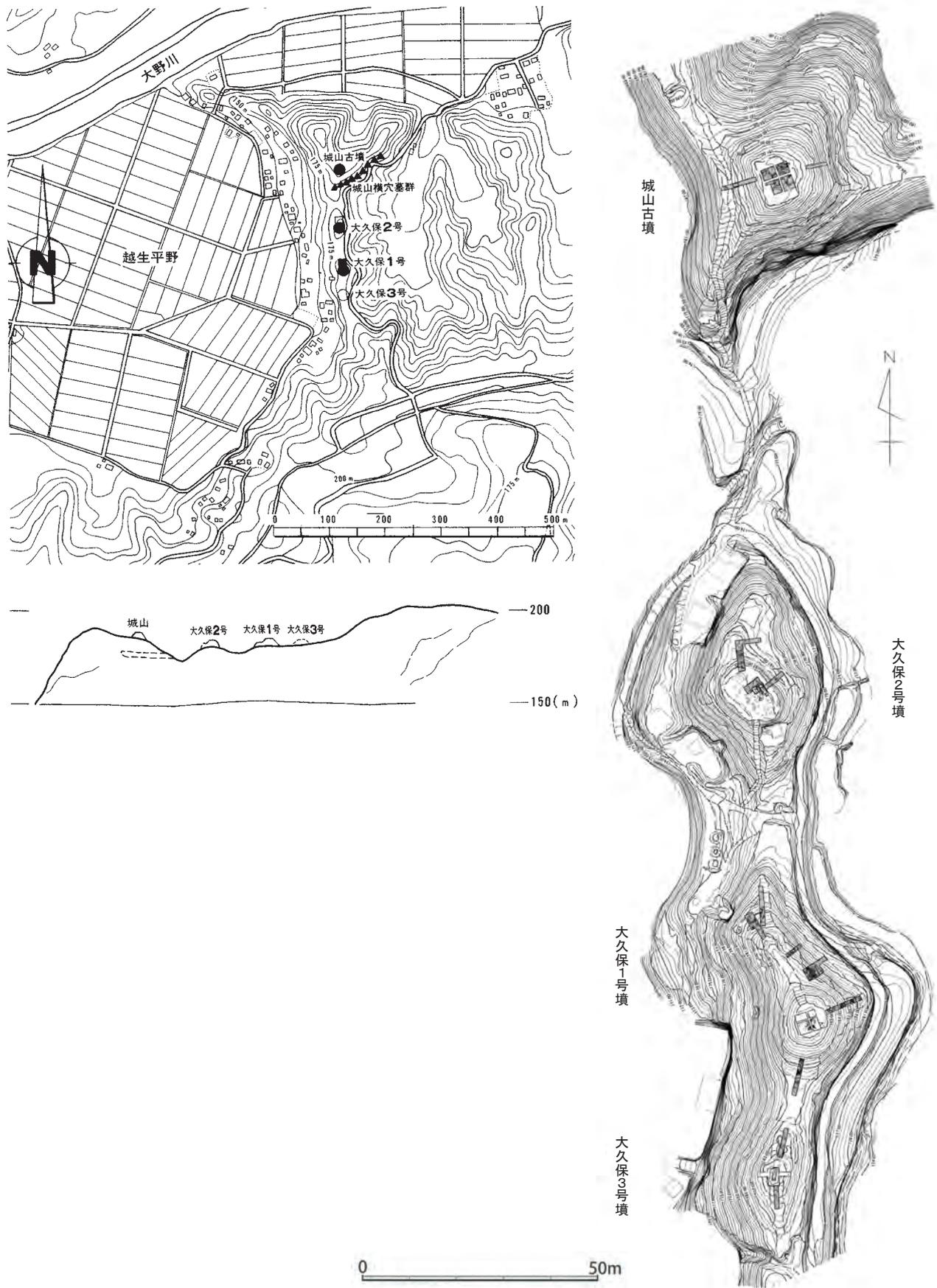


図4 漆生古墳群

古墳時代	七つ森古墳群	漆生古墳群	上田原古墳群	三重古墳群
前期	3期	第1の画期		●小坂大塚古墳
	4期	第2の画期		●道の上古墳
中期	5期	●大久保1号墳 ●立野古墳		●重政古墳 ●秋葉鬼塚古墳
	6期	第3の画期		○浪平石棺群
	7期	第4の画期		●竜が鼻古墳

- は前方後円墳 ○は円墳あるいは可能性の高い古墳
- 重政古墳は立野古墳と同一形式の壺形輪軸を出土している点、小坂大塚古墳は墳形が七つ森C・B号墳より似ている点、道の上・秋葉鬼塚古墳は墳形から見て6期以後にはくだらないと考えている。竜が鼻の時期は不明だが前期の4古墳との間にはヒアタスがあると考えている。

図5 1992年段階の漆生古墳群の編年表

本稿の時系列区分			共同墓地の変遷	積方地域
時期	年代	期		漆生古墳群
前期	前前期	前1期	共同墓地 古市上通跡	● 城山18: 箱形石棺 ● 大久保1号36: 前方後円墳
		前2期		
	前期中葉	前3期		
		前4期		
	前期末葉	前5期		
	前期末(中期初期)	前6期		
中期	中前期	集成5期	区画墓群 (補野遺跡方形周溝墓群)	● 大久保2号10: 舟形石棺蓋+岩盤剝抜 ● 大久保3号10: 石棺蓋+岩盤剝抜
		集成6期		
	中期中葉	前半		
		後半		
	中期末葉	前半 (TK218)		
		後半 (TK208)		
中期末	集成8期	横穴墓群		
後期	後前期	前半 (MT15)	城山横穴墓群	
		後半 (TK10)		
	後期末葉	前半 (TK43)		
		後半 (TK209)		
終末期	7世紀第IV四半	(TK217)		
	7世紀第III四半	豊後北部中部II期		
	7世紀第IV四半	豊後北部中部III期		

図6 漆生古墳群編年表

(古墳名のあとの数値は、墳長あるいは径：単位M)

という期間のどこかに築造がおこなわれたと考えられた。

城山古墳は戦国時代の城郭普請によってかなり変形がくわえられた径約18mの円墳<sup>(2)</sup>で、やや西に振るがほぼ南北向きの2基の主体部の痕跡が確認され、中心主体は硬質の凝灰岩を利用した箱形石棺であることが判明した。1992(平成4)年の調査の際には中期後半の最終段階の箱形石棺と推定していたが、今回の調査で石棺材に未熟な段階のほぞが彫り込まれていることと残された土師器高坏片から、前期後半の時間幅の中に収まると判断された。

大久保2号墳は近世の墓地造成で大きく変形されていたため、墳丘形態は判然としないが、凝灰岩の山体を削り出し葺石も持たない小墳と判明した。主体部は凝灰岩の地盤を直接くりぬき、蓋石は舟形石棺の蓋石のみをかぶせた「石棺蓋岩盤剝抜墓」と呼ぶべき埋葬施設であった。

大久保3号墳は2号墳と同様に岩盤剝抜のうえに、縄掛け突起を削り出した箱形石棺の蓋をかぶせる「石蓋岩盤剝抜墓」であった。大久保2号墳と3号墳は副葬品がなかったが埋葬施設の構造が一致し、2号墳は石棺蓋形態が同じ豊後大野市三重町の鉢の窪古墳群の舟形石棺と同一形態であること、鉢の窪3号墳において同一古墳に同じ形式の舟形石棺とともに縄掛け突起を有する蓋石をもつ箱形石棺が並置されていることから、二つの古墳は集成7期ごろの中期後半の築造と推定された。

城山横穴墓群は7世紀に下る横穴墓群であるが、その分布は4か所に分かれ、城山古墳の直下に造られた4基の横穴墓が一群となり、ほかの3基はそれぞれ数10mから100m近くはなれて点在する。同時期に四つの群が築造を開始したが、継続したのは一群のみということになる。

漆生古墳群の評価 調査の結果は事前の

予想に反して一代一墳的な系譜的築造ではなく、前期後半に城山古墳と大久保1号墳が、中期後半に大久保2号墳と3号墳が、さらに7世紀前半に城山横穴墓群が間欠的に築かれていることが判明した。地形的に見て北端の城山古墳と南端の大久保3号墳のあいだには、同規模の小墳が造られる余地はないから、墳丘を持つ古墳はこれ以上造られなかったものと推定される。そうすると漆生古墳群には3回の古墳築造期があり、1回目が前期の後半、2回目が中期後半、3回目は7世紀初め、都合3回である。各時期の古墳たとえば城山古墳と大久保1号墳は同時に造られたとまでは言えないが、近い時期に連続して造られていることは確実であり、大久保2号墳と3号墳も同様である。城山横穴墓群は4つの集団が同時に墓域を設定して築造が開始されたが、一集団をのぞいて継続して築造されることなく終わっている。現在考えている編年表は図6である。

このように漆生古墳群の特徴は、第1に古墳時代前期から中期にかけて背景をなす母集団<sup>(3)</sup>から分節した首長が、同一の墓域を間欠的に利用したことにある。三度にわたり首長を分節した母集団が同一の集団であったことは、城山古墳と大久保2号墳・3号墳の埋葬施設の方が南北方向で同一であり、横穴墓群の起点となった一群が城山古墳の直下の崖面に造られているから、半世紀あるいは1世紀以上の間隔をあけて造墓を再開するにあたって、城山古墳を「始祖」の墓として伝承した集団が古墳時代を通じて存在したことから推定される。

第2の特徴は3回にわたる古墳築造の際には、在地の伝統ではない外来の要素によって古墳群が造られていることである。前期後半の城山古墳には箱形石棺が南北方向に設けられているが、最近の調査で豊後大野地域の古墳時代の前期の集団墓地では、箱形木棺を東西方向に設けることが通常であることが判明している<sup>(4)</sup>。前期後半～中期前半に箱形石棺を南北方向に向ける埋葬は大分市上ノ坊古墳や同市亀塚古墳など別府湾岸の海部地方で見ることができ、臼杵市臼塚古墳の舟形石棺も南北方向を向いている。城山古墳が海部地域の盟主墳クラスの大規模墳の埋葬方法を共有することは、城山古墳の被葬者が、海部地域の首長と密接な関係を持っていたことによる。さらにその前後に墳長36mの前方後円墳大久保1号墳が築かれている。大久保1号墳は小規模ながら段築をおこない、斜面全面に葺石をふき平坦面には小円礫をしきつめて正しい手順の古墳造営がおこなわれており、別府湾沿岸部の勢力を介して倭王権の墓制である前方後円墳が導入されたと考えてよい。少なくとも大久保1号墳の被葬者は直接か間接かは別にして、倭王権との関係を持ったことは確かである。以上のように城山古墳と大久保1号墳の被葬者は、豊後の海部地域の首長とそこを介して間接的に倭王権に結びつくことで、箱形石棺という埋葬施設と前方後円墳という構造物を造ることができたと考えられる<sup>(5)</sup>。

2回目に古墳群が造られた大久保2号墳と3号墳の埋葬主体は、石棺蓋あるいは石蓋をおこなう岩盤剝抜墓という特殊な墓制である。この墓制の類似例は熊本県内で山鹿市灰塚古墳第1主体と同県宇土市西潤野1号墳で知られている<sup>(6)</sup>。石棺蓋および棺蓋の形態については同じ豊後大野市三重町の鉢の窪3号墳の二つの石棺と極めてよく似ている<sup>(7)</sup>。つまり大久保2号墳と3号墳の被葬者は鉢の窪古墳群の所在する三重地区大野川流域の首長と、肥後の首長という東西の地域と関係を持っていることは明白である。

3回目の横穴墓については豊後南部地域では中期末のTK47期に最古のものが出現するが[工藤2010]、城山横穴墓群で出現するのは7世紀になってからである。この時期には在地ですでに規範化していた埋葬様式である横穴墓を利用した小墳群が造られたと考えられよう。

第3の特徴は、城山古墳と大久保1号墳、大久保2号墳と3号墳をそれぞれ前後関係にある系譜的築造と考えても、前期後半の城山古墳・大久保1号墳と中期後半の大久保2号墳・3号墳とのあいだと、大久保2号墳・3号墳と城山横穴墓群との間にはそれぞれ1世紀近くのヒアタスがあることである。漆生古墳群が全体として同一母体から分節した首長の墓地であったことはすでに述べた。するとその間古墳が造られていな

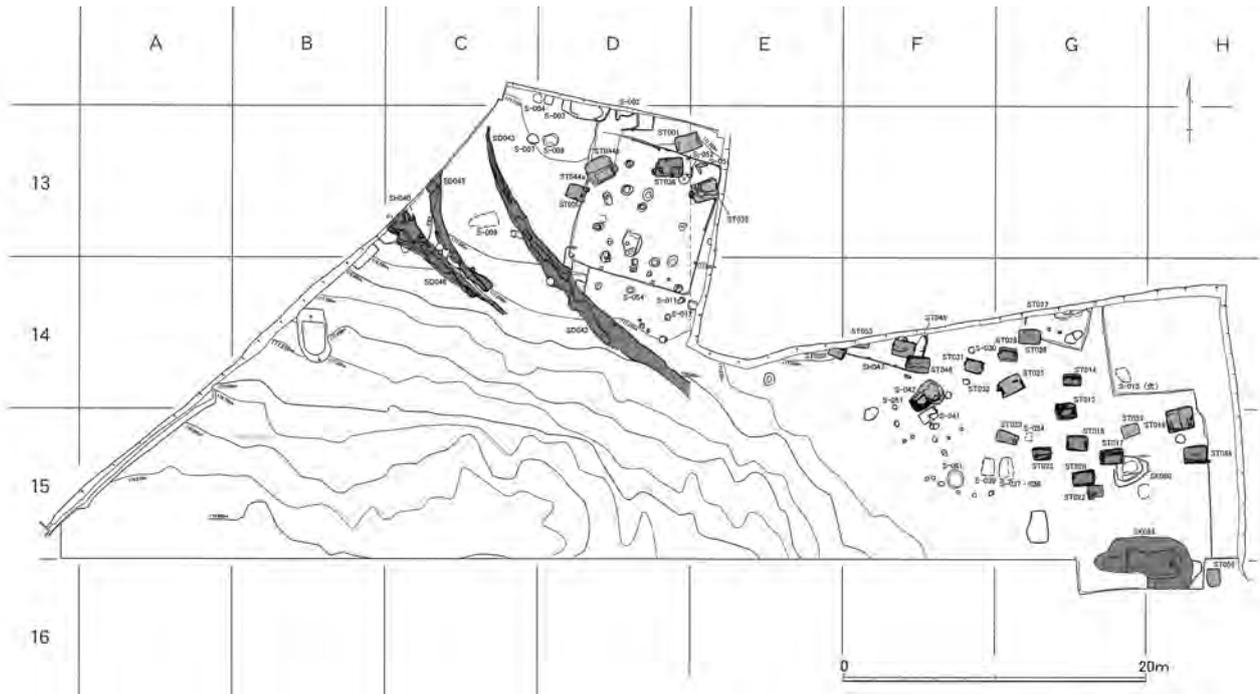


図7 古市上遺跡の集団墓地

いのはなぜだろうか。今のところ漆生古墳群が所在する緒方盆地及びその周辺では、各地に横穴墓群が所在することは知られているが、前期から中期の古墳は全く知られていない。ただこの地域の集落にともなう墓地については古墳時代前期には集団墓地が造られており、その後、前期の末ごろから中期にかけては集団墓地が分節して区画墓群に移行することが推測される<sup>(8)</sup>。すなわち豊後大野市朝地町古市上遺跡〔後藤・吉田 2014〕では同時代の集落の近接地に東西方向に並列する木棺墓群が数列配された弥生時代終末期から古墳時代前期後半の集団墓地（図7）が発見されており、さらに竹田市楠野遺跡では前期末から中期初めの「方形周溝墓群」が知られ、主体部は石棺ではないと推定されている。規模の同一性等から報告者はその共同体的性格を強調し、首長的性格は考えられないとまとめている〔玉永 1983〕。筆者は古墳時代前期末の段階でこの地域では集団墓地の分節化が進行し、「方形周溝墓」群＝区画墓群に推移していったものと考えている。そのような背景の中では、緒方盆地とその周辺のような特定の地域内のそれぞれ集団墓地をもつ複数の集落を代表、あるいは若狭徹〔若狭 2017〕の用語でいえば複数の集落から「共立」された首長が出身集落からはなれて別個に墓域を設けて葬られたと考えられる。しかし共立された首長が漆生古墳群に埋葬される事態は3回しかなかったもので、100年に一度程度のことと考えられる。したがって、漆生古墳群は系譜的に首長が代をおって築造埋葬された古墳群ではなく、この地域の集落群が他の地域との関係を強化する必要が生じるような特定の政治的状況に対応して、とくにその権威を認められた特定の首長のみが葬られたのではないか。そうでない場合、首長は漆生古墳群には葬られず、前期ならば各集団の集団墓地、中期ならば区画墓に葬られたと考えられないだろうか。

次に大型の前方後円墳が集中する三重盆地の場合はどうであろうか。

### 3 豊後大野市内大型古墳の発掘調査成果

**調査前の見解** 研究史の節ですでに詳しくふれたので、ここでは調査に入る前の段階の2009（平成21）年の筆者の考えを簡単にまとめておこう。

①豊後大野市三重地域には、秋葉鬼塚古墳、立野古墳、小坂大塚古墳、重政古墳、道ノ上古墳、竜ヶ鼻古墳の6基の前方後円墳が築かれている。さらにその周囲の豊後大野市市域には大型古墳を造りうる単位地域が茜川流域、平井川流域、緒方川流域の三か所あり、平井川流域には前方後円墳である坊ノ原古墳が、緒方川流域には大久保1号墳が造られている。

②埴輪の編年から、立野古墳は前期後半の古い時期、重政古墳と道ノ上古墳は中期前葉、竜ヶ鼻古墳は中期後葉に築造されたと推定される。これを集成編年で表示すれば立野古墳は3期、重政と道ノ上は5期、竜ヶ鼻は7ないし8期となる。坊ノ原古墳は箱形石棺の残骸から古墳時代前半期の築造としか言えない。

③墳丘形態の比較から、秋葉鬼塚古墳は前期前半（2期）に、小坂大塚古墳は前期後半から中期前葉（4期？）に比定される。

④三重地域には小古墳をふくめて古墳群が継続して造られる単位地区が、上田原地区、小坂地区、内田地区、市場地区の4地区がある。以上の編年をまとめたのが図3である。

⑤三重地域全体を総括する地域首長が前方後円墳を築造し、各地区の代表する地区単位の首長は円墳に葬られる。また同時期に副首長格の別の地区の首長が前方後円墳を造ることがある。

⑥地域首長は秋葉鬼塚古墳（市場地区）、立野古墳（上田原地区）、道ノ上古墳（内田地区）、竜ヶ鼻古墳（市場地区）と4つの地区間を移動しながら、一つの首長系譜として築造される。

⑦中期前葉に、海岸部を掌握する豊後海部の大首長の交代—亀塚古墳から臼塚古墳へ—を背景に、三重盆地最大の前方後円墳である道ノ上古墳が築造され、各地区の小古墳でも舟形石棺が主体部に採用される大きな画期がある。

⑧中期には地域首長が前方後円墳を築かない時期があり、中期後葉の竜ヶ鼻古墳の築造をもって終焉する。

**現時点での見解** 結論を先に言えば、この5年間の調査によって、秋葉鬼塚古墳は前期前半ではなく中期前葉の古墳であることが明らかになり、坊ノ原古墳は前期末の古墳である可能性が強くなった。その結果、豊後大野市内の前方後円墳は前期後半から中期前葉に集中し、各古墳群は系譜的築造というよりは、この時期に繰り返された豊後海部地域の大首長による政治的編成に対応した、系列的築造の累積として理解できるのではないかと考えている<sup>(9)</sup>。以下、現状で古い順と考えている古墳の順で記述する。

#### A. 立野古墳と周囲の古墳群（立野古墳群）（図8）

後円部を西に向ける前方後円墳である〔田中編1998〕。上田原地区の河岸段丘上の最も高い段丘面に立地する。近接地に規模不明ながら3基の小古墳が造られている。いずれも詳細は不明であるが1基は箱形石棺が出土したと伝えられている。立野古墳と周囲の3古墳をあわせて立野古墳群とよぶ。漆生古墳群と同様な共同墓地・区画墓群から分離して系譜的に築造された古墳群と評価でき、そのなかの1基が前方後円墳として造られたと考えられる。

立野古墳の墳長は約65m。後円部径は約38.5m、前方部長は約26.5m。後円部の高さは約6.5m、前方部の高さは約3.5m。くびれ部の幅と前方部前端の幅はともに約20mで前方部は柄鏡形である。段築は不明瞭だが、全面に葺石が施され、墳端には大型の石材をもちい、特に後円部の墳端根石は1m以上ある凝灰岩をもちいている。このように大型の石材を墳端にもちいるのは、大分県内では杵築市小熊山古墳に類例がある〔吉田ほか2006〕。

周溝内からはまとまった量の埴輪が出土した。円筒埴輪と壺形埴輪、および後者の一部を乗せると考えられる「器台形埴輪」が出土したが、朝顔形埴輪や家形埴輪、器財埴輪の破片は見つかっていない。想定される配置状況からみて、壺形埴輪を主とし円筒埴輪を従とする埴輪の量的組成である。円筒埴輪は大分市内大分川河川敷採集の埴輪と類似しており〔田中1999〕、この二つの円筒埴輪の形態については大阪府茨木市の將軍山古墳や、大阪府柏原市玉手山1号墳例と同じく口縁部が大きく外反し、方形透かしの位置と形態が類

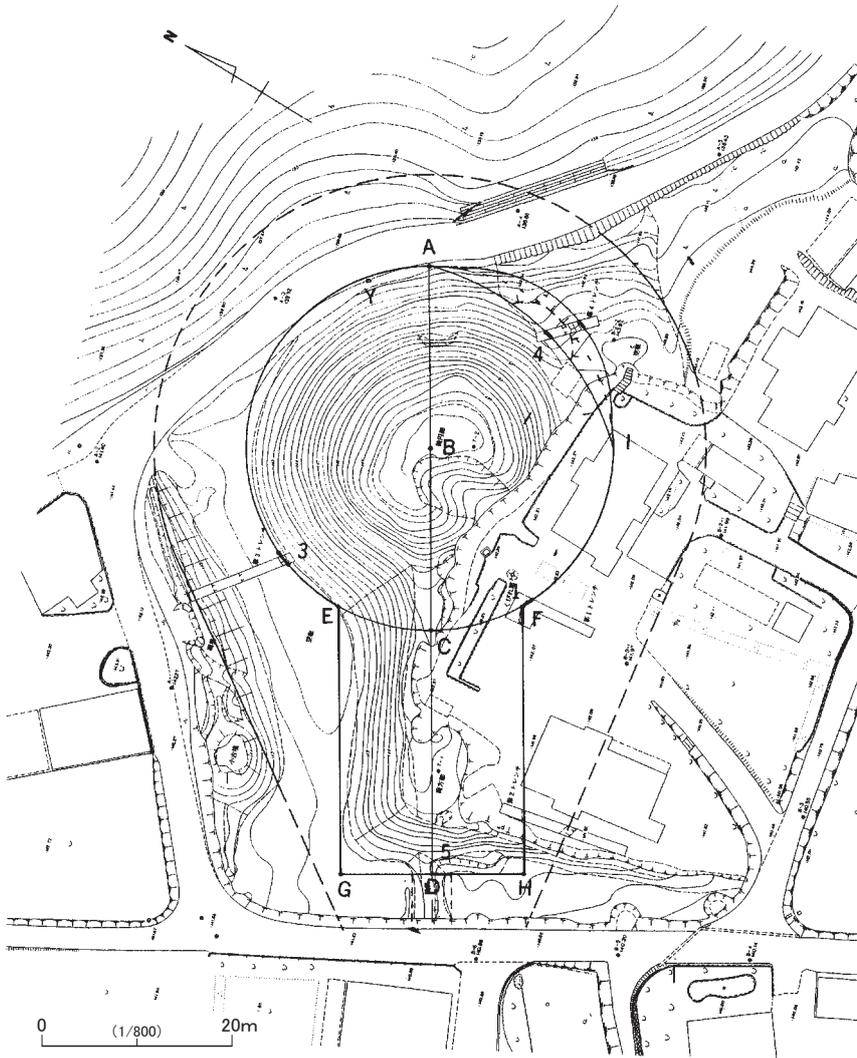


図8 立野古墳

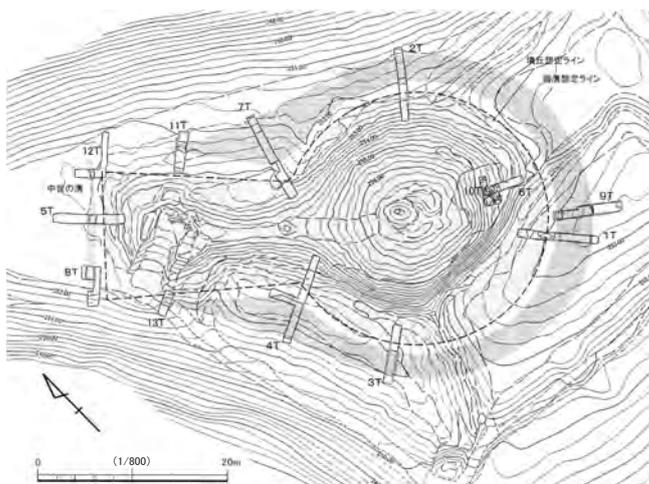


図9 坊ノ原古墳

似する。築造時期については、円筒埴輪の編年からみて、前期中葉の後半あるいは前期後半の古いところ、集成編年で言えば3期に当たると考えられる。墳丘形態については渋谷向山古墳の9分の2の相似墳という指摘がある〔澤田 2017〕。

**B. 坊ノ原古墳 (図9)**

三重盆地の北西に位置する大野川の支流平井川の流域に位置する。同じ流域に中期の大型円墳が点在することなどから、平井川流域は大型古墳を造りうる単位地域となるといえる。1970年代の測量時の所見では墳長45mの前方部の狭小な前方後円墳で、前方部の祠の石棺材から古式の古墳であると考えられていた。2013年度に測量調査、2014～15年度に発掘調査がおこなわれた。その結果墳長46m、後円部径27m、周溝は馬蹄形で、前方部前端までは廻らないことが判明し、葺石を施していなかった。埴輪の使用はなく、出土した布留式甕から前期末の古墳であると考えられる。

独立丘陵の頂上部に単独で立地しており、周囲に古墳群が存在する可能性はなく、出身集団の墓制から分離して単独に造られた首長墳であるといえる。

**C. 小坂大塚古墳 (図10)**

調査前には前方部はほぼ南西に向く墳長約43mの前方後円墳。後円部径は約25.5～27m、

前方部長は約16m、くびれ部の幅と前方部前端の幅はともに約10mで、柄鏡形である。後円部頂と前方部頂の比高差は3mと計測されていた。築造の時期については、墳丘形態しか手がかりがない。後円部に対して前方部が著しく小さく、前方部の高さが後円部に比べて非常に低い。このような墳丘形態の特徴を持つ古

墳が、大分県の場合、古墳時代前期後半から中期初頭にかけて普及したことをかつて指摘したことがある〔田中1995〕。坊ノ原古墳（46 m）、竹田市の七つ森古墳B/C墳（53 m/49 m）をあげることができ、以上の古墳は小坂大塚古墳もふくめて墳丘規模がほぼ等しく、大野川中上流域の前期後半の地域性と考えた。以上が2009（平成21）年の筆者の見解である。

2011（平成23）年度に測量調査と発掘調査を行った結果、墳丘の形態は坊ノ原古墳と竹田市の七つ森古墳B/C墳とよく似ていることが改めて確認され〔玉川2012〕、墳丘に沿う前方後円形の周溝と、後円部をめぐる墳端テラスとテラスの平坦面まで広がるしっかりした葺石を検出したが、埴輪や土器類の出土はなかった。現状では手掛かりに乏しいが、前期末の築造と考えられる。三重低地中心部から東に離れた台地上にあり、その丘陵の東側には三重川が流れている。周囲にはほかの古墳や墓等は確認されていない。単独墳の状況を示している。

**D. 重政古墳（図11）**

古墳は、三重低地中心部の台地西端にあり、その台地の西側には三重川が流れ、三重盆地の中央に位置する。この台地上にはほかに古墳や墓等は確認されていない。墳長54 m以上に復元される前方後円墳である〔諸岡1998〕。2017（平成29）年度に測量調査と発掘調査を行っているが、なお調査中で判明したことのみを追加する。

前方部を西北西に向け、後円部径は約30 m、前方部長は約27 mとされている。後円部の高さは約3 m、前方部の高さは約2 mで、比高差は2 m程度ある。段築は後円部2段前方部2段、全面に葺石が存在している。前方部前端はくびれ部よりも広がっていく。葺石は墳裾でテラス状に平坦に葺かれている。

壺形埴輪が発見され、円

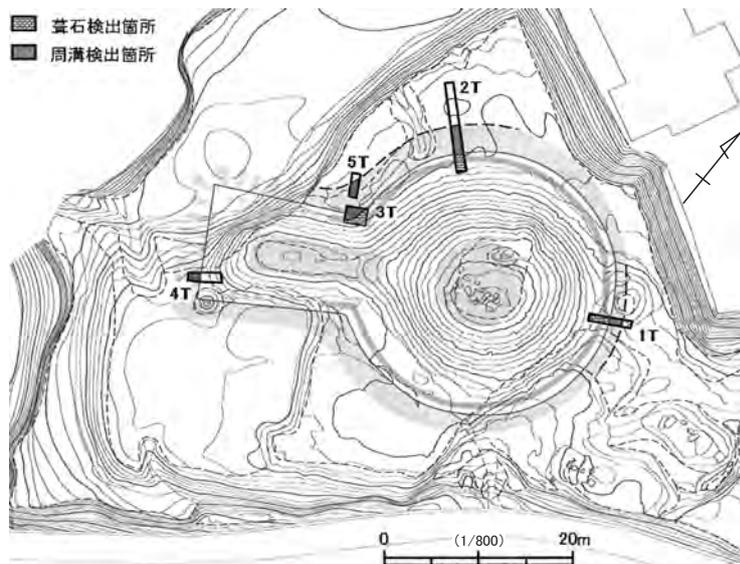


図10 小坂大塚古墳



図11 重政古墳

筒埴輪はいまのところ確認されていない。壺形埴輪は長胴化した胴部に径10cm以下の平底を作り出して、その中央に焼成前の穿孔を施したものである。内外面ともハケ調整で、穿孔は底部の外側からえぐるように行われており、中津市勘助野地1号墳出土の壺形埴輪の底部穿孔手法とまったく同一である〔村上・田中1988〕。

築造の時期については、墳丘形態からは道ノ上古墳との類似が指摘されている〔玉川2015〕。壺形埴輪について、主体部の副葬品から中期前葉の方墳であることが判明している中津市勘助野地1号墳出土の壺形埴輪と酷似することから、古墳時代中期前葉に築造されたものと考えられる。

**E. 道ノ上古墳（図12）**

豊後大野市三重町大字赤嶺字下赤嶺に所在する前方後円墳である〔諸岡2002〕。2000（平成12）年に三重町教委によってトレンチ調査が行われた〔諸岡2002〕。前方部をほぼ西に向けて、台地の西端の尾根に向けて前方部を向けるように選地する。墳丘長は約74m、後円部径は約48m、前方部長は約28mと推定される。後円部の高さは約7m、前方部の高さは約4mで、比高差は3m程度ある。くびれ部の幅19mと前方部前端の幅は約22mで、前方部は前端に向かって開き、それにあわせて前方部の墳頂もわずかに高くなる。墳丘の段築は不明瞭だが、墳端には後円部とくびれ部で幅1～2mほどの低い墳端テラスがあり、葺石の根石には大型の河原石をもちいている。後円部には幅6m深さ1.3m以上の逆台形の周溝が掘られているが、くびれ部や前方部では発見されていない。

黒斑のある円筒埴輪と壺形埴輪が出土したが、形象埴輪等は出土していない。円筒埴輪は厚手で、外面はナゲ調整で突帯も粗雑な台形が多く、出土量が少ないため詳細を知ることはできない。壺形埴輪は長胴化が進み、肩部はなで肩で底部は開放したまま積み上げる。

古墳は三重低地の東側、沖積地を見下ろす標高150mの台地上に築造され、台地西端の尾根上の高まりを利用して造られている。築造された場所は三重盆地全体を見渡せる位置にあり、東方にはなれた小坂大塚古墳も見ることができ、三重盆地の古墳群の中で最もよい位置に造られているといえる。

墳丘形態と埴輪から築造時期を考えてみよう。前方部が墳端に向かってやや高くなる点は、前方部墳頂が

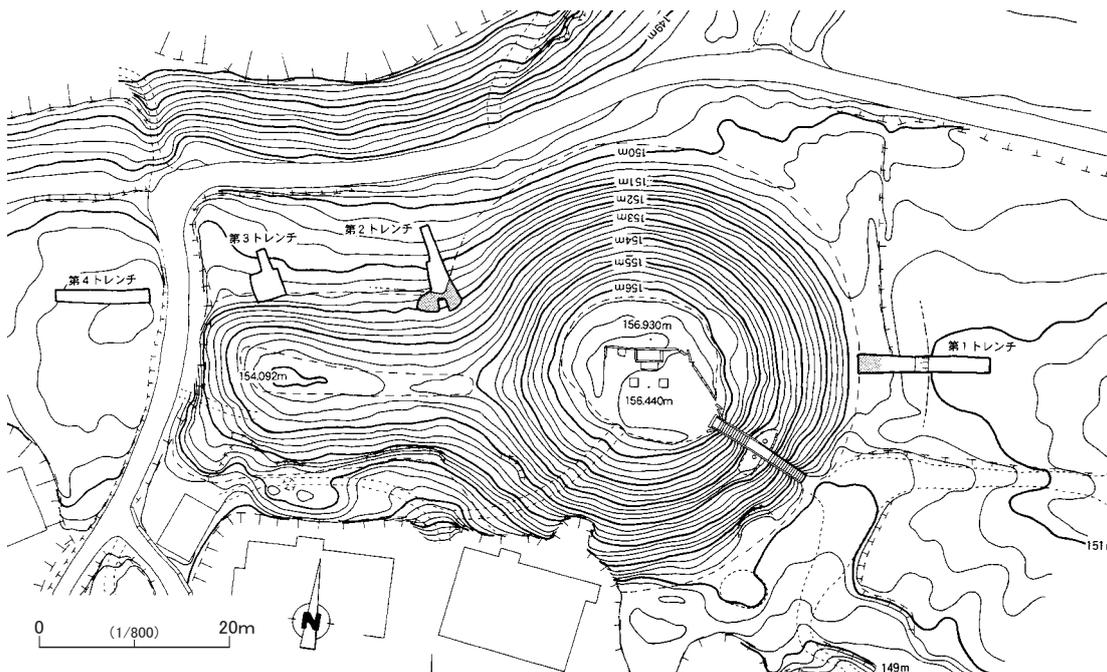


図12 道ノ上古墳

水平である立野古墳、小坂大塚古墳、重政古墳より、やや発達した設計規格によって造られ、秋葉鬼塚古墳とは非常によく似た墳丘規格であると指摘されている〔玉川 2015〕。また埴輪から見ると円筒埴輪は全体に粗いつくりで、壺形埴輪は三重盆地の各古墳から出土したものとしては最も新しいものと言える。しかしともに穴窯焼成以前のつくりであるので、重政古墳・秋葉鬼塚古墳と同時期にあたる古墳時代中期前葉の築造と考えられる。

#### F. 秋葉鬼塚古墳 (図 13)

調査以前の見解は以下の通り。前方部をほぼ真西に向けている。現状で残された墳丘の長さは約 42 m であるが、復元すると墳長は約 49 m。後円部径は約 28 m、前方部長は約 21 m。後円部の高さは約 3 m、前方部の高さは約 2 m。段築は不明瞭だが、葺石が存在する。周溝等の存在は不明である。平坦面が径 15 m 程度と推定され、非常に広い印象を受ける。主体部は未発見で、墳丘からは土師器や埴輪類は採集されていなかった。築造の時期であるが、副葬品や埴輪等が全くなく、その墳丘形態から古墳時代前期前半に溯る古い形態の可能性が高いと推定していた。

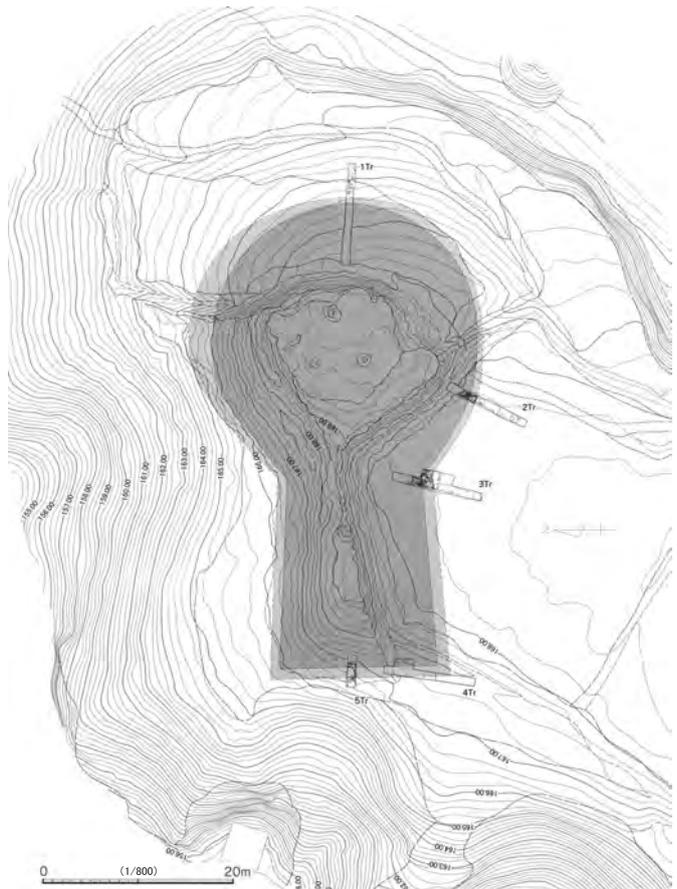


図 13 秋葉鬼塚古墳

ところが発掘調査の結果おおきな修正が加えられた。墳長 52 m、後円部径は 31 ~ 32 m、前方部長は 20 m、一部途切れるところもあるが馬蹄形の周溝が巡り、葺石も丹念に施されている。墳頂部は後世にかなり削平されていて、そのために墳頂部が広く見えたのである。測量の結果平面形は、道ノ上古墳と相似することが報告されている〔玉川 2015〕。周溝からは川西 3 期の円筒埴輪とその時期に相当する壺形埴輪が発見され、出土遺物の点からも道ノ上古墳と同時期であることが判明した。

2009 (平成 21) 年段階では三重盆地最古の古墳の可能性を考えていたが、調査の結果はおもいがけず、新しくなり中期前葉の古墳となった。しかも当地最大規模の前方後円墳である道ノ上古墳と前後つけることができないほど同時期であることが判明した。

#### G. 竜ヶ鼻古墳 (図 14)

損壊が激しく 1998 (平成 10) 年に行われたトレンチ調査で、埴輪が出土したことから前方後円墳であることが確認された。その際三重町教委によって墳丘測量図が作成され、西側に前方部を向けると判断された〔諸岡 2000〕。墳丘長は約 40 m に復元され、後円部と前方部の境界ははっきりと指摘できないが、後円部径 23 m、前方部長 17 m 程度と推定される。後円部の高さは 3 m、前方部の高さも 2.5 m で、前方部が発達していたものと推察される。現況では改変がはげしく段築、造り出し、葺石等は確認できない。特にトレンチ調査から石材の崩落が認められないところから、葺石が存在しなかったことは確実であろう。後円部東端のトレンチでは底部幅 6 m ほどの溝が検出されたが、丘陵の切断を意図したものと考えられている。

穴窯焼成の円筒埴輪が出土している。朝顔形埴輪の破片も出土しているが、器財や形象埴輪らしき破片や壺形埴輪は出土していない。円筒の口縁部は軽く外反し、突帯は粗雑な台形から三角までの幅があり、粗い

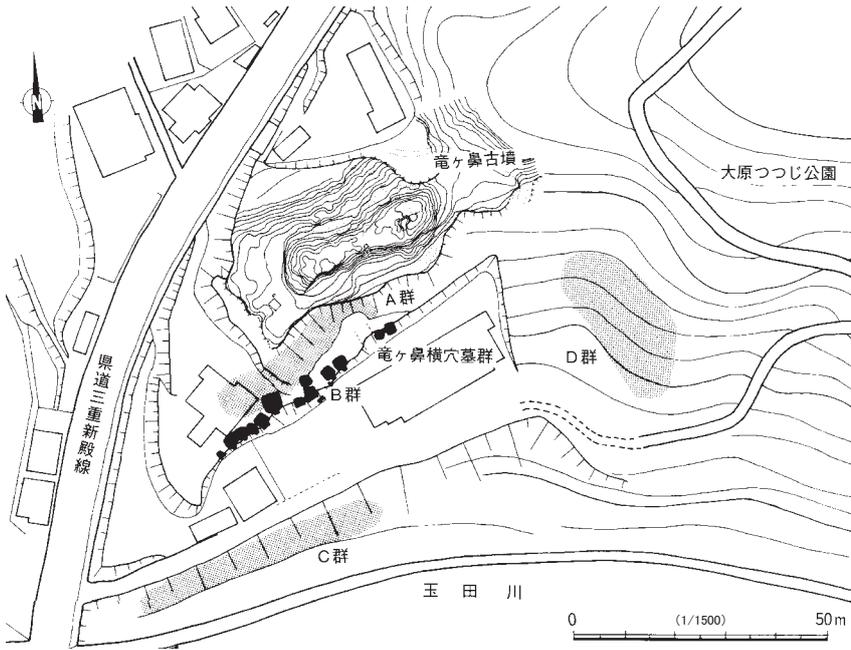


図14 竜ヶ鼻古墳と竜ヶ鼻横穴墓群

タテハケ調整のものと、外面にB種ヨコハケを施す破片がある。

三重盆地を南に見下ろす大原台地上から派出した尾根に立地し、竜ヶ鼻古墳の南側の斜面には三重町最大規模の竜ヶ鼻横穴墓群が群集しているが、竜ヶ鼻古墳の周囲には古墳は存在しない。単独立地である。築造時期は、B種ヨコハケが残る川西4期の円筒埴輪の中でも突帯の形状などから見て最も新しい時期と考えられるので、集成8期まで下る可能性が高い。

H. 鉢の窪古墳群、下津留古墳群、内田古墳群、漬平古墳群（図15）

三重盆地周辺には集落に付属する

区画墓群から分離した中期の小古墳群が知られている。これらの古墳群の性格と地理的關係を検討する。

**鉢の窪古墳群**〔諸岡1997、田中編1998〕 立野古墳の西北側300mの、段丘を一段降りた地点に分布する7基からなる古墳群である。1基が硬質凝灰岩製の箱形石棺であるほかは、すべて凝灰岩製の刳貫式の舟形石棺で、いずれも径が10m程度の円墳である。石棺の中には石枕を削り出した例があり、中期前半に築造されたものと推定される。立野古墳群と同一の丘陵上に立地しており、立野古墳群と鉢の窪古墳群は合わせて一連の古墳群と考えられる。前期後半の立野古墳から始まり中期後半の鉢の窪3号墳まで、三重盆地内では唯一といってよい、系譜的築造と考えられる古墳群である。最初に墳長65mの前方後円墳立野古墳が造られるが、その後は立野古墳群や鉢の窪古墳群のような箱形石棺と舟形石棺を中心主体とする径20m以内の小円墳が造られている。これまでの調査で古墳群の周辺に、集団墓地や区画墓群は発見されていないので、三重地域の豊後川流域の集落群を代表する首長の墓域と考えられる<sup>(10)</sup>。

**下津留古墳群**〔田中編1998〕 さらに段丘を下った豊後川本流域に接する河岸段丘上に、いずれも硬質凝灰岩製の箱形石棺を主体部とする4基の墳丘を有する古墳が存在する。鉢の窪古墳群に並行あるいは後続する古墳時代中期後半の古墳群と考えられる。

立野古墳を始まりとする立野古墳群（前期後半）→鉢の窪古墳群（中期前半～後半）→下津留古墳群（中期後半）という関係を見出すことができる。

**内田古墳群**〔諸岡2003〕 道ノ上古墳が見下ろす谷を南にさかのぼった谷奥の丘陵斜面に立地する2基からなる円墳群で、凝灰岩製の箱形石棺の破片と土師器が出土している。1号墳は径17mである。出土した土師器の型式的特徴から中期前葉～後半の古墳群と考えられる〔中西・服部2002〕。1号墳は中期前葉、2号墳は中期後半。内田古墳群が立地する場所からは道ノ上古墳が遠望でき、同じ三重川流域の小地域を背景にするものと考えられる。道ノ上古墳（中期前葉）→内田古墳群（中期前葉～後半）の系譜的関係を推定できる。

**漬平古墳群**〔玉永1987〕 小坂大塚古墳のさらに東方に位置し、凝灰岩製の舟形石棺と箱形石棺を主体部とする4基の円墳群からなる。舟形石棺が使用された中期前半から箱形石棺を主体部とした中期後半まで継続したものと推定される。漬平古墳群は三重低地から東にはなれた東部の台地上に位置しているため、低

地の古墳群と無関係にも見えるが、小坂大塚古墳を望むことができ、三重川流域の同一母集団を背景にしているものと推定される。そこからは小坂大塚古墳→潰平古墳群の変遷を想定できる。

以上調査前の見解と比較すると、①前方後円墳や大型円墳の分布に変更はないが、②古墳の編年はおおきくことなり、最古と思われた秋葉鬼塚古墳が中期前葉に、坊の原古墳と小坂大塚古墳が前期末に限定できるようになった。また古墳が出現する背景となる地域も三重盆地周辺を4地域から3地域に前方後円墳の分布ではなく、古墳群の分布から見直した。このように首長系譜論の前提となる地域単位と年代が整理されると単純な

首長系譜論では豊後大野市の古墳群は説明しがたいことになった。その点を詳述しよう。

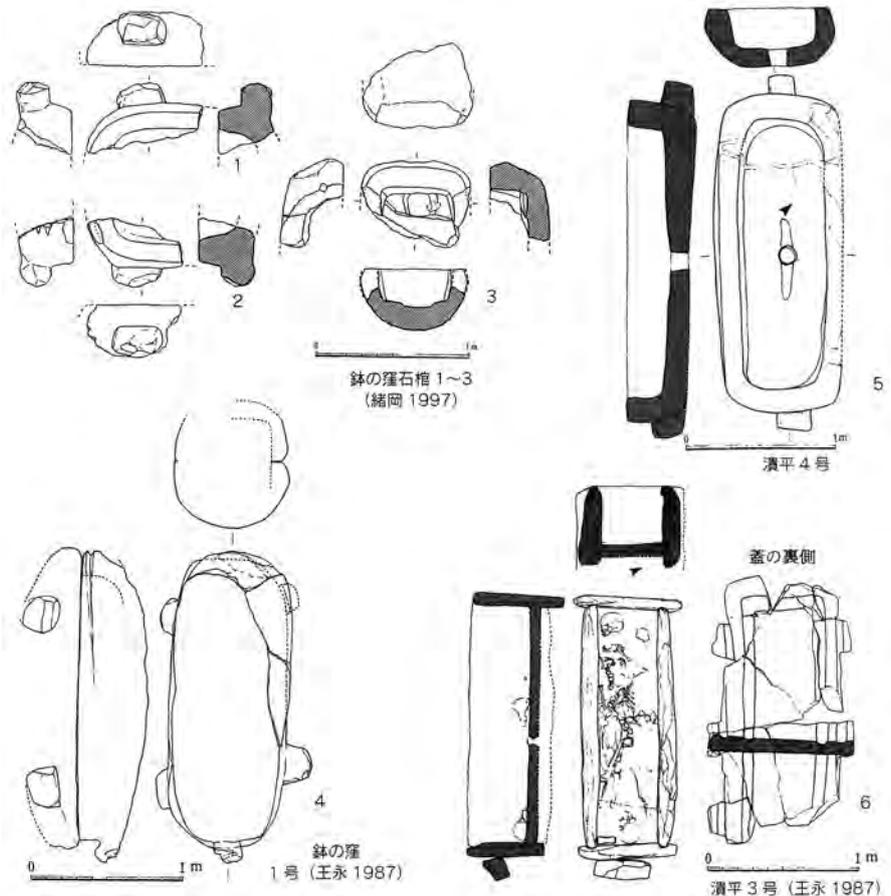


図15 小規模古墳の石棺

#### 4 大野川中流域の古墳時代墓制と古墳群

豊後大野市内の古墳時代前期から中期の墓制は、集団墓地、区画墓群、古墳群と、単独立地の大型古墳の4種類に整理することができる。弥生時代以来の集落に付随する集団墓地は古墳時代前期末に区画墓群に変化し、並行して、前期中ごろに集落群から分離した古墳群が出現し、前期末に単独立地の大型古墳がさらに分離するという推移が認められる(図16)。この4種類の墓制について説明する。

**集団墓地** 集落に付属する弥生時代以来の集団墓地は古墳時代前期末まで継続する。豊後大野市朝地町古市上遺跡、竹田市久住町都野原田遺跡〔宮内 2001〕が典型例であり、集落域に隣接して墓地が営まれる。墓地の内部は列状に幾つかのまとまりにグルーピングできるが、明瞭ではない。埋葬施設はほとんどが箱形の木棺墓で東西方向に棺をすえる。

**区画墓群** 各報告の中で方形周溝墓あるいは周溝墓と記載された墓域を画する溝が巡る遺構が、密接して造られる墓地である。集団墓地と同じく集落に隣接して設けられる。拠点集落では前期の後半には区画墓群が出現し(豊後大野市:陳箱遺跡, 円形周溝墓)、一般的な集落でも前期末には区画墓群が出現する(竹田市:楠野遺跡, 方形周溝墓, 豊後大野市大野町:加原遺跡, 方形墓)。中期の実例はないが、その状況は日田市の草場第二遺跡の様相からみると中期末の横穴墓の出現まで続くと考えられる〔高橋編 1989〕。区画墓群の主体部は例外的に箱形石棺をもうける竹田市久住町小城原遺跡方形周溝墓の例もあるが、大半は木棺墓と考

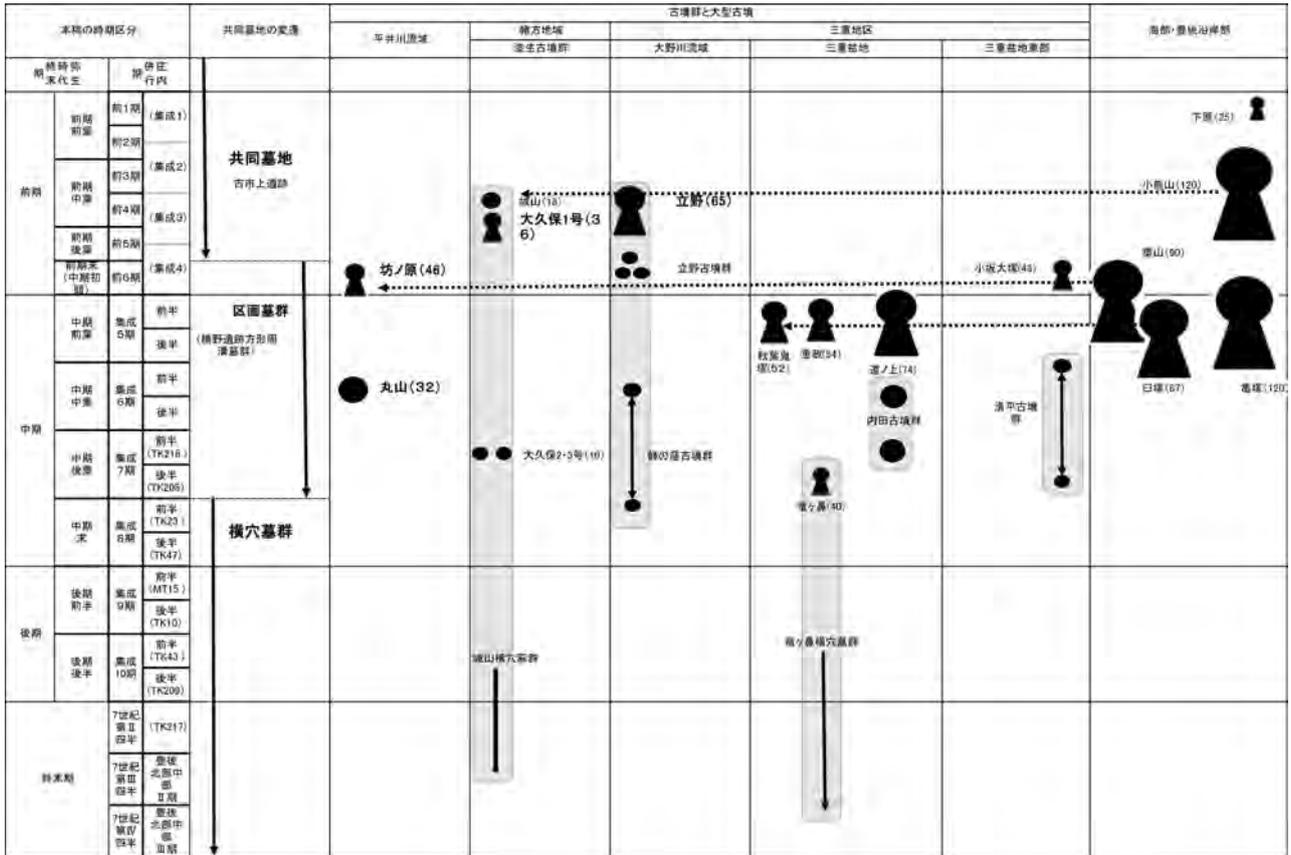


図 16 豊後大野古墳群編年表

えられている。埋葬施設も東西方向をむける。

豊後大野市から竹田市をふくむ大野川中上流域では集団墓地や区画墓群は集落に隣接して存在する点と、主体部が組合せ式の箱形木棺である点、集団墓地が前期末ごろには区画墓群に変化するが集落に近接する点で同一の特徴であるので、ともに集落の共同墓地という性格をもっていると考えられる。

**古墳群** 前期の中ごろから集落から離れた丘陵上あるいは台地上などに径10～20m前後の円墳を築き、首長が葬られる。そのような首長を共立した単位は、拠点集落をふくむ集落群からなる政治的単位地域といえ、豊後大野市内では大野川支流の平井川流域、緒方盆地周辺（漆生古墳群）、三重地区大野川流域（立野古墳群・鉢の窪古墳群・下津留古墳群）、三重盆地東部（潰平古墳群）、三重盆地（内田古墳群）などである。集落からはなれ集団墓地や区画墓群からも分離した古墳が築造され、最初に造られた古墳を起点にして古墳群が出現する地域もある。これらの古墳の被葬者は各単位地域の首長と考えられる。前期後半にはそのような小円墳からなる古墳群の中に大久保1号墳（35m）や立野古墳（65m）などの前方後円墳が築造されている。埋葬施設をみると集団墓地で用いられる木棺墓とはことなり、前期には箱形石棺（城山古墳）が用いられる。中期になると舟形石棺を主体部に採用している。また漆生古墳群のように、埋葬施設の方向が南北をむき、集落の埋葬（集団墓地あるいは区画墓群）との差別化が認められる。

しかしこの古墳群の第1に挙げるべき特徴は漆生古墳群の分析で指摘したように、同一の地点に古墳群を形成しながら、系譜的に連続する築造ではなく、外部との関係が強化されるように事態が発生した際にイベント的に造られる間欠的築造である点である。立野古墳群と鉢の窪古墳群のあいだにもヒアタスがあると考えられるので、このヒアタスのあいだに活動した首長の墓がどうなったかが問題である。漆生古墳群を例にとると、漆生古墳群の前期末と中期前葉は古墳の空白期である。たとえば前期末の時点で漆生古墳群の所在

する緒方地域からほぼ等間隔にはなれて、坊ノ原古墳、小坂大塚古墳、七つ森古墳の同規模の3古墳が築造されている。緒方地域の首長は労働力と古墳祭祀という観点からいえば、自らの古墳を築かずに、上記3古墳への労働力提供と古墳祭祀への参加をしたのではなかろうか。3古墳の首長を介して同時代に築造されたと考えられる大分市神崎築山古墳（90 m：前方後円墳）などの築造や古墳祭祀にも参加した可能性も考えられる。そのような近隣集団と多方向的に従属的關係を取り結ぶ可能性の高い時期には、首長は古墳を造らせずに集団墓地に葬られたと考えられる。いっぽう集成7期の中期後半には漆生古墳群では小円墳である大久保2号墳と3号墳が造られているが、この時期には大野川中上流域には大型古墳は全く造られておらず、豊後南部でも海部地域の小亀塚古墳（40 m：前方後円墳）が、唯一最大規模の前方後円墳である。大久保2号墳と3号墳の特徴である埋葬施設と棺蓋からみると、肥後や三重盆地と相互に連絡を持った可能性は高く、海部地域の古墳築造や祭祀に参加したとは思えない。つまりこの時期にはかなり自律的な政治的単位として古墳を造っているのではないだろうか。

**単独立地の大型古墳** 前期末になると各単位地域に、集団墓地からも前記の古墳群からもはなれて前方後円墳などの大型古墳が築造される。まず坊ノ原古墳（46 m）と小坂大塚古墳（43 m）である。次の中期前葉には、道ノ上古墳（74 m）・秋葉鬼塚古墳（52 m）・重政古墳（54 m）がほぼ同時期に単独で築造される。ほかに単独立地する円墳（御塚古墳、上尾塚丸山古墳）が存在するがいずれも径が30 mを超えるものが多い。前方後円墳の主体部の情報が欠けているが、坊ノ原古墳では箱形石棺の可能性が指摘されている。小円墳からなる古墳群やそこから離れた単独立地の大型古墳の主体部は前期には箱形石棺、中期には舟形石棺をもちいる傾向にある。径10 mの円墳から墳長40 mをこえる前方後円墳まで、集落から分離した古墳では箱形石棺あるいは舟形石棺など外部から導入された埋葬施設を共通の主体部に採用して、集落と密着した集団墓地や区画墓群と差別化しているのである。

## 5 共同墓地と首長墓

**集団墓地・区画墓群・横穴墓群** 以上のように古墳時代をとおして豊後大野市内の墓制の推移をおっていくと、集落に密着した墓制としては前期末に集団墓地から区画墓群に、さらに中期末に横穴墓群へという2度の変化によって画される3段階がある。最初の集団墓地から区画墓群への変化は、各集落に付属して立地の変化を伴わず、集落成員の分節の様相が変化したことを示すにすぎず、300年近く墓域を継続する墓地も存在する<sup>(11)</sup>。これに対して集落の近辺の低地に造られていた区画墓群が分解して、首長墓としての竜ヶ鼻古墳の周囲に集落の上位階層の墓が群集するようになる後期前半の変化（豊後大野市竜ヶ鼻横穴墓群）は、集落の構造変動を伴うとりわけ影響の大きな変化と考えられる。

**政治的単位地域とその首長墓** 集落から離れた台地や丘陵上に古墳が造られるのは大野川中上流域や大分川上流域では古墳時代前期中ごろからであると考えられる。豊後大野市では漆生古墳群、立野古墳群や、竹田市久住町の仏原・有氏の古墳群<sup>(12)</sup>が典型例である。前方後円墳の最初の築造もこの3古墳群内でそれぞれ始まる。政治的単位ごとの首長墓が特定の同じ場所に選地されるようになったこと、つまり古墳群が成立し始めたと考えられる。首長墓の系譜的築造と評価されるべきはこのような、ときに大型古墳や前方後円墳をまじえる小古墳からなる古墳群である。

しかし漆生古墳群においてすでにみたように、古墳群としての系譜意識は存在しているが、実際の古墳は間欠的にしか築造されておらず、長い空白期が存在する。築造の契機も同一ではなく、時には海部の政治的影響、時には肥後や隣接集団との関係によって首長墳が造られていると考えられる。立野古墳群にしても最初期に立野古墳が造られて別府湾岸の海部勢力あるいは倭王権との関係が認められるが、その後ヒアタスが

あり、中期後半の鉢の窪古墳群は舟形石棺による首長墳が造られていて、別府湾岸の箱形石棺を主体部とする政治勢力との関係は薄くなっている。久住地域の仏原・有氏の古墳群の場合は仏原千人塚1号墳から2号墳への系譜的築造は認められるが、中原方形墓は1号墳とほとんど同時期であるし、最後に造られる湯の上古墳は中期にくんだり、2号墳との間にヒアタスがある。その後この古墳群は継続しない。主体部は中原方形墓と湯の上古墳で箱形石棺が知られており、海部の影響下で成立したことは明瞭である。

このような政治的単位地域が成立し首長の墓地としての古墳群が形成を始めるが、首長墓の間欠的築造つまりヒアタスの存在から考えると、そこに古墳を造ることのできた首長は限られていたのではないかと考えられる。くり返しになるが海部の首長との密接な政治的関係を介して倭王権との関係に入ることを必要とするような政治的事態など対外的な重大な出来事を経験した首長が古墳群に埋葬され、そうでないときは政治的単位を代表する首長であっても、彼らは集団墓地や区画墓群の中に葬られ、その場合の労働力提供や古墳祭祀への参加は、彼らが相互に対等で互酬的關係をもつ近隣集団や、政治的に一時的に従属した別の集団に向かったと考えられる。

**単独立地の前方後円墳** 古墳時代前期末から中期前葉になると、古墳群から飛び出して単独で立地する大型古墳が目立つようになる。しかし先に論じたように豊後大野地域では単独立地の大型古墳である前方後円墳が造られる時期は3度しかない。第1回目は前期末に築造された坊ノ原古墳(46 m)と小坂大塚古墳(43 m)である。両者とも前方後円墳で墳丘規模はよく似ており、墳丘の形態はこの2墳と、竹田市七つ森古墳群の2基の前方後円墳が類似し同時期のものと考えられるが、その特徴の一つは埴輪の類がないことと、坊ノ原古墳では葺石を施されていないなど、古墳の重要な構成要素が抜けている点にある。以上の前方後円墳は政治的単位地域を異にしている。前期後半に前方後円墳を造った漆生古墳群や立野古墳群とは異なる地域に築造されている。

第2回目に単独立地の古墳が造られるのは、中期前葉である。三重盆地にきびすを接するように道ノ上古墳(74 m)、重政古墳(54 m)、秋葉鬼塚古墳(52 m)の3基の古墳が造られる。この3基の前方後円墳が出現する前史となる前期の古墳群は知られておらず、それまで前方後円墳を造ったことのない地域に突然出現する。この三つの前方後円墳は築造時期が非常に近いというだけでなく、墳丘形態の特徴(埴輪テラスの存在)も相似し、壺形埴輪を主とする埴輪から構成される点もよく似ている。中期後半から後期にかけての状況から見て、同一の政治的単位地域と考えられる領域に3基の前方後円墳が、ほぼ同時期に造られていると考えられる。

第3回目は三重盆地の竜ヶ鼻古墳(40 m)である。重政古墳の立地する台地に対面する台地上に造られた前方後円墳である。B種ヨコハケの円筒埴輪を持ち、集成7期ないし8期と考えられている。竜ヶ鼻古墳の周囲では後期になると数十基以上の横穴墓が群集する竜ヶ鼻横穴墓群が形成される。三重盆地においては唯一の横穴墓群であるので、後期になると、政治的単位として三重盆地は一つであった可能性を示す分布である。

## 6 大野川中流域の前方後円墳築造の背景

最初に前方後円墳が築造された前期後半には、立野古墳と城山古墳あるいは大久保1号墳が、規模の違いはあるものの異なる地区に別個の古墳として出現している。立野古墳と大久保1号墳は大野川の本流域の渡河点をおろす丘陵上に築かれるという立地上の共通点があり、交通路の起点となる別府湾岸とりわけ海部の首長と相互に独立して従属的關係を結んだ結果と考えられる。つぎの前期末には坊ノ原古墳と小坂大塚古墳が、立野古墳や大久保1号墳とは異なる地区に築かれている。墳丘規格が類似し規模も大きな差はないの

で、やはり別個に海部地域と政治的関係を結んだ結果であると推定される。そのつぎの中期前葉には墳丘の形態や埴輪の様相が極めてよく似ている道ノ上古墳、重政古墳、秋葉鬼塚古墳がそれまでとはさらに異なる狭い一地域の中にきびすを接するように造られている。最後にやや時期をおいて竜ヶ鼻古墳が前代と同一地域に造られている。これらの古墳群は調査前に想定したような系譜的築造と考えられるだろうか。

前方後円墳が集中する三重地区大野川流域、三重盆地東部、三重盆地の3地区は、水系は異なるけれども低丘陵を介して隣接しており、立野古墳→小坂大塚古墳→道ノ上古墳と竜ヶ鼻古墳が時期を異にして造られているので、三つの政治的単位地区を統合した首長の可能性がある。しかし中期中ごろのどの地域にも前方後円墳がない時代に、埋葬施設のことなる古墳群が継続していたり、道ノ上古墳の近接地域に重政古墳と秋葉鬼塚古墳の前方後円墳が併存することからも、漆生古墳群の所在する緒方地域や朝地地域をふくめた政治的統合が達成されていたとは考えにくい。

3地域を統合した盟主的首長の首長墓系譜を考えるよりも、豊後大野地域に前方後円墳および大型円墳が出現した、前期後半、前期末、中期前葉、中期末の4度の時期に、海部地域を介して倭王権と一時的な政治的関係を取り結ぶために、横串をとおすように各地の大小の集団とその首長を同盟に誘うイベントがあったと考えてはどうだろうか。その結果が岸本道昭のいう古墳の系列的築造となると考えられる〔岸本2004〕。そのような関係は一時的、一代的なもので、一度結んだ関係は継続的なものではなく、容易に解消される性格であったと考えられる。また4回の系列的築造もその性格、波及する範囲などは異なっていたと推測される。前方後円墳を造らなかった地域や、造らない時期には、外部勢力との積極的な政治的関係をむすばなかったのではないか。前方後円墳を造り、外部世界と同じ形式の埋葬施設を造るということは、墳丘形態や規模、埋葬施設の違い、副葬品の内容や数量によって、首長の優劣や外部集団との上下関係といった政治的力関係を表示することであり、そういう従属を嫌い、その関係に自己の都合で入ったり抜けたりするような、政治的単位の自律性が担保されるような関係が、同一地域に系列的築造が繰り返されながらも前後の古墳に首長墓系譜を簡単にみいだせないような古墳の分布と変遷をうみだしているのではないか。いっぽうで古墳や前方後円墳を造らない時期にも、外部との関係を遮断するわけではなく、周囲に存在する他集団の前方後円墳造りに自律的互酬的に協力することで、対等な政治的経済的関係を維持した可能性はないだろうか。

ちなみに豊後大野地域に前方後円墳が造られた4つの時期の海部地域を介して倭王権と結んだ政治的関係とは、①古墳時代前期後半（集成3期ごろ）の立野古墳は埴端に大型の根石を用いる点と埴輪の構成の類似などから杵築市小熊山古墳の影響下にあり、②前期末（集成4期）の小坂大塚古墳と坊ノ原古墳は埴輪を持たないことから大分市神崎築山古墳に類似し、③中期前葉（集成5期）の道ノ上古墳、秋葉鬼塚古墳は壺形埴輪の形態と円筒埴輪の少量さなどから臼杵市白塚古墳と下山古墳にきわめて類似している。しかし亀塚古墳に類似した様相の古墳はない。④中期後葉（集成8期前半）の竜ヶ鼻古墳は、埴輪は海部の大分市辻1号墳に近いが、墳丘規模に大差はない。

それぞれ海部の大首長との政治的従属関係を結んだ豊後大野地域の特定の地域の首長が、その関係の性格に従って墳丘築造技術、埴輪工人の派遣などの援助をうけて築造し、同時に周辺の様々な集団との相互的互酬的關係にもとづく労働力の提供と埋葬儀礼への参加をうけて築かれたと考えておきたい。そして単位地域の古墳群のところでも指摘したが、倭政権が、豊後南部の首長を組織化することが必要なイベントが発生したとき、その代表となる、国東あるいは海部の首長を介して、豊後南部の首長を組織化したものとする。そのさい各地の首長を網羅的に組織したわけではなく、交通路の確保や、兵士、兵糧の確保など様々な必要に応じて政治的関係を結んだ首長もいれば、相互的互酬的關係だけにとどめて、積極的關係に応じなかった集団も存在していたと考えられるし、倭政権が各地の首長を組織化するイベントも恒常的ではなく、強弱もあり、在地集団からみれば、自律的に対応することができたと考えられる。

## まとめ

以上やや冗長に漆生古墳群と豊後大野市の前方後円墳群について述べてきたが、大野川の中流域の古墳時代おもに前中期の集落と墓地の特徴をまとめると、集落と共同墓地（前期の集団墓地から中期の区画墓群）が比較的隣接して存在する集落が多数分布して水系ごとあるいは何らかの共通の利害でまとまった政治的単位地域（おそらく大野川支流の平井川流域、緒方盆地周辺、三重地区大野川流域、三重盆地東部、三重盆地など5地区）が、おそらく弥生時代以来さまざまな理由で生成しつつあった。

古墳時代にはいると政治的単位地域の領域が安定し、前期中ごろにはその安定を背景に各構成集落から離れた丘陵上あるいは台地上などに古墳群を築造するようになる。政治的単位を代表して共立された首長墓の出現と評価される。はじめは径20m程度の円墳（城山古墳）、あるいは前方後円墳（立野古墳）から始まることもあるが、後続の首長が、同じ場所に首長墓を造り続けるという点において、首長墓の系譜的築造がおこなわれたと呼べるのは、このレベルの古墳群である。

古墳時代前期末からは上記の古墳群からも離れて単独立地の前方後円墳や大型円墳が築造されるが、時期を異にして地域も異なって築造されているから、単独立地の前方後円墳が一つの首長墓系譜をなしているわけではない。また首長権の移動を考えるためには各政治的単位を統合した上位の首長権とその領域が成立していなければならないが、その候補となる豊後南部内陸部で最大規模の前方後円墳である道ノ上古墳（74m）が造られていたとき、同一の政治的単位の中において近接時期に重政古墳（54m）と秋葉鬼塚古墳（52m）という前方後円墳が築造されており、この3墳の首長の関係を考慮すると、道ノ上古墳を盟主的首長であったとは考え難く、この3墳か、3代の系譜的首長墓とも考えにくい。

以上のように豊後大野地域には政治的単位の古墳群から分離した単独立地の前方後円墳が多数出現しているが、単一の首長墓系譜と評価できるかと問われると、筆者には疑問である。そのうえ古墳群を検討してみると時期を異にして首長墳が間欠的に造られているので、その政治的単位の古墳時代前期中期のすべての首長が古墳群あるいは前方後円墳を造ったとは考え難い。

そのため古墳を造らずに出身集落の共同墓地（集団墓地や区画墓群）に葬られた首長がかなり存在したと推定されるが、彼らが外部世界から孤立していたわけではない。土師器の型式変化の共時性、鉄製武器の普及具合などからみて、周辺の集団あるいはかなり遠い集団との交易関係や互酬的協力関係をふくむ、おそらく多方向かつ多面的に経済的文化的関係を結んでいたと推定される。それを背景に対等的自律的な政治的関係を維持できたと考えられる。ひるがえって各首長が前方後円墳あるいは大型円墳をつくるのは倭政権あるいは海部地域の首長との一方向的政治関係が強化されたときであると考えられるが、しかしその関係は一時的で継続的なものではなかったのではないだろうか。古墳時代の豊後大野地域の首長にとって、古墳造りというのは小古墳にしろ前方後円墳にしろ実は例外的な現象で、一見多数の古墳が造られているように見えても、年代の限定が可能になればなるほど、一時的に同時期に複数の古墳が造られたりして、古墳が系譜的に築造されるのではなく間欠的にしか築造されていないと考えられる。

最後に、豊後大野市の古墳群に対する1980年代の清水宗昭と後藤宗俊の見解の相違に立ち戻っておきたい。清水が想定した政治的単位地域を広域に統合する盟主の存在については否定的で、後藤の見解と同じく前方後円墳の被葬者の直接掌握する地域は極めて小さく、その周囲には前方後円墳を造らない、つまり海部の首長や倭政権との直接的政治的関係をもたない多くの政治的単位が存在したものと考えられる。もちろんそうした集団が前方後円墳を築造した集団と無関係であったわけではなく、対等で互酬的な関係をもとに古墳築造に協力したものと考えられる。ひとつの政治的単位の中に同時に3基の前方後円墳がつくられた中期前葉の三重盆地のような事態は、広範な周辺集団の協力なしには不可能であろう。しかし次代には、周辺地

域も含めて、前方後円墳の築造が行われなかったことからみると、広域に労働力を結集し大型古墳を築造するような首長間の系列的な政治的関係は、継続的固定的な関係に転化する契機をもたない、自律的対等な関係による政治的結集であると考えられる。前方後円墳を造らない集団の立場から見れば、多元的多方向的に周辺集団の古墳造りには協力するが、海部の首長や倭政権との直接的・一方向的な関係には入らないことを選択することが可能であったと考えられ、古墳時代とくに前中期の倭政権の中核から遠い九州のこの地方の政治構造は、前方後円墳造りから離脱しても、その政治的集団が自律的に存立できた時代ではなかったろうか。古墳時代後期から7世紀にかけて、そのような構造が担保されなくなり、あらゆる地方の政治単位が直接間接に倭政権との政治的関係を持つ体制に入らざるを得なくなると展望される。

## 註

- (1) 「方形周溝墓」あるいは「小方墳」などと呼ばれることも多いが、周溝などの区画施設をもたない埋葬施設の集積としての集団墓地と区別し、また集団墓地と分離した前方後円墳などの古墳とも区別して、松木武彦にならって「区画墓」と呼ぶことにしたい。この区画墓群は松木武彦がのべた「小墳群」[松木2018]にあたり、集団墓地とともに集落に直接に結びつく墓域であるという認識を共有する。集団墓地と区画墓群の相違は豊後南部大野川中上流域の古墳時代においては、時期差であると考えている。すなわちおおまかには古墳時代前期は集団墓地、中期は区画墓群であり、その変化の時期は地域によって微妙に異なると認識している。
- (2) 城山古墳は測量調査では1辺23～25mほどの方墳という評価がなされたが、発掘調査の結果、戦国期の城郭建設で墳頂部と側面が削平されたことが判明し、大きく改変された径18mほどの円墳であると推定された。
- (3) 漆生古墳群の位置する緒方盆地一帯には、後期になると多数の横穴墓群が造られるようになるが、前中期の墳丘を有する古墳はほかに知られていないので、漆生古墳群は松木武彦のいう「個別区画の小墳群」[松木2018]に対応するものではなく、緒方地域全体を代表したものと考えている。したがって母集団とは緒方地域全体の集落群と考えられる。大野川中上流域では、前期前半とところによっては前期後半までは個別の集落には隣接して集団墓地が形成される。代表例は豊後大野市朝地町古市上遺跡[後藤・吉田2014]である。
- (4) 2010(平成22)年に調査された豊後大野市朝地町古市上遺跡では弥生時代終末期から古墳時代前期後半にかけての木棺墓29基が発見されている[後藤・吉田2014]。2011(平成23)年には豊後大野市三重町陣箱遺跡で前期中ごろの「周溝墓」とされる小円形区画墓が調査されている。主体部は東西方向に置かれた木棺であった。またやや離れるが竹田市久住町都野原田遺跡や仏原千人塚古墳群などでも木棺墓と土壙墓からなる東西方向に長軸を向けた古墳時代前期の集団墓地が1990年代に調査されている[宮内2001・2002]。
- (5) 澤田秀美の類型墳と非類型墳の議論[澤田2017]に従えば、豊後には畿内大王墓の類型墳として、行燈山古墳類型墳である小熊山古墳、渋谷向山古墳の類型墳である築山古墳、佐紀陵山古墳の類型墳である亀塚古墳が築かれている。さらに類型墳からあらためて墳形が再分配された非類型墳が豊後各地に存在することを澤田は指摘した。氏の議論を援用すると大久保1号墳の首長が、倭王権中核と直接関係をもつ類型墳の首長をつうじて前方後円墳の築造が行われた可能性があり、大久保1号墳の築造者が前方後円墳を造りえたのは直接には豊後の類型墳の首長との関係によると考えられる。もちろん大久保1号墳の墳形がどの古墳の非類型墳になるかはこれからの課題である。
- (6) 高木恭二が「舟形蓋土壙」あるいは「舟形土壙」と呼んだ埋葬施設である[高木1994]。
- (7) 豊後大野市の概報8[塩見ほか2018]で指摘したが、箱形石棺の蓋石に縄掛け突起をつくりだす例が、福岡県筑豊地方の飯塚市きょう塚古墳と川津1号墳で知られている[嶋田ほか2016]。ともに中期後半の古墳で、大久保2・3号墳と同時期であり、かなり離れているが交流があったものと推定される。
- (8) 竹田市楠野遺跡では前期末の台地上に散在する集落に対応して方形周溝墓群が成立することが知られており、その被葬者に首長的性格を否定する見解が出されている[王永編1983]。筆者は楠野遺跡の方形周溝墓群を、集落にともなう区画墓群と考えている。
- (9) 岸本道昭の古墳の系譜的築造と系列的築造の概念の相違を重視したい[岸本2004]。
- (10) この古墳群の背景となる集落の中でも拠点集落と考えられる陣箱遺跡において、立野古墳と同時期の前期後半の箱形木棺墓を埋葬施設とする円形周溝墓が発見されており[諸岡2018]、中心的集落ではいち早く集団墓地の区画墓化が進行したものと考えられる。
- (11) 日田市草場第二遺跡[高橋編1989]は2世紀中ごろの弥生時代の後期後半から始まった集団墓地が、古墳時代前期後半

には区画部群に姿をかえ、5世紀後半の中期後半の円形墓である17号墓まで同一の場所に墓地を継続する。

- (12) 久住山麓に広がる弥生時代後期から古墳時代前期の集落群には、木棺墓からなる集団墓地が伴っているが、集落群の中央の丘陵に、仏原千人塚1号墳（前方後方墳26m以上）、中原方形周溝墓（16m）、仏原千人塚2号墳（前方後円墳35m）の3基が前期後半に、湯ノ上古墳（円墳24m）が中期前葉に築造されており、この仏原・有氏の古墳群は久住地域の集落群全体を代表する首長墳と評価されよう。

#### 引用・参考文献

- 神田高士・後藤幹彦・田中裕介・諸岡 郁・渡部幹雄 1993「緒方町越生にある漆生古墳群の観察—大久保2号石棺の実測と大久保1号墳の測量調査から—」『おおいた考古』第6集、大分県考古学会
- 岸本道昭 2004「播磨の前方後円墳とヤマト政権」『古墳時代の政治構造』青木書店
- 工藤心平 2010「豊後地方における横穴墓の一樣相—直入地域の初期横穴墓について—」『大分県地方史』208、大分県地方史研究会
- 後藤一重・吉田 寛 2014『古市下遺跡・古市上遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第74集、大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 後藤宗俊 1974a「大分県下流域における在地首長の成立と発展」『大分県地方史』73号、大分県地方史研究会
- 後藤宗俊 1974b「豊後国海部地方における在地首長の成立と発展」『大分県地方史』74号、大分県地方史研究会
- 後藤宗俊 1982「大和国家の成立と二豊の在地首長」『大分県史』、大分県（後藤宗俊1991『東九州歴史考古学論考』山口書店に再録）
- 澤田秀実 2017『前方後円墳秩序の成立と展開』同成社
- 塩見恭平・高木慎太郎・竹永昂平・玉川剛司・田中裕介 2018「漆生古墳群（第6次調査）」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』8、豊後大野市教育委員会
- 清水宗昭 1977「坊ノ原古墳」『大野原台地の遺跡—大分県大野原地区土地改良事業関係遺跡群予備調査概要Ⅱ』大野町教育委員会
- 清水宗昭 1980「考察編—結語に代えて—」『大野原の遺跡—大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書』大野町教育委員会
- 清水宗昭 1998「立野古墳発見の経緯」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯、大分県教育委員会
- 清水宗昭・田中裕介 1998「道ノ上古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯、大分県教育委員会
- 清水宗昭・牧尾義則 1980「大野原台地の主要古墳」『大野原の遺跡—大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書』大野町教育委員会
- 嶋田光一ほか 2016「古墳時代」『飯塚市史』上巻、飯塚市
- 高木恭二 1994「九州の刳拔式石棺について」『古代文化』第46巻第5号、古代学協会
- 高橋 徹編 1989『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10、大分県教育委員会
- 田中裕介 1992「各地の概要—豊後—」『前方後円墳集成』九州編、山川出版社
- 田中裕介 1995「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期（上）」『おおいた考古』第7集、大分県考古学会
- 田中裕介編 1998『大分の前方後円墳—三重・西国東地区編』大分県文化財調査報告書第100輯、大分県教育委員会
- 田中裕介 1999「大分県埴輪資料集成Ⅰ」『おおいた考古』第11集、大分県考古学会
- 田中裕介 2009「豊後大野市三重地域の首長墓とその動向」『地域の考古学—佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集—』同刊行会
- 玉川剛司 2012「小坂大塚古墳測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』2、豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2015「秋葉鬼塚古墳測量調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5、豊後大野市教育委員会
- 玉川剛司 2016「坊ノ原古墳墳丘測量調査について」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6、豊後大野市教育委員会
- 玉永光洋編 1983『楠野』大分県文化財調査報告第63輯、大分県教育委員会
- 玉永光洋 1987「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
- 中西武尚・服部真和 2002「古墳時代中・後期の土師器—大分県—」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料、九州前方後円墳研究会
- 橋本幸治 1998「小坂大塚古墳」『大分の前方後円墳』大分県文化財調査報告書第100輯、大分県教育委員会
- 日名子太郎 1929「大野郡古墳横穴調査書」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告』第7輯、大分県史跡名勝天然記念物調査会

- 本庄 昇・前田多三郎 1924「三重郷の古墳」『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』3、大分県史蹟名勝天然記念物調査会
- 松木武彦 2018「倭王権の地域構造—小古墳と集落を中心とした分析より—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集、国立歴史民俗博物館
- 真野和夫 1990「地域の古墳1 東部（大分）」『古墳時代の研究』第10巻、雄山閣
- 宮内克己 2001『都野原田遺跡』久住町教育委員会・大分県教育委員会
- 宮内克己 2002『仏原千人塚古墳群』久住町教育委員会・大分県教育委員会
- 村上久和・田中裕介 1988「勘助野地遺跡」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』1、大分県教育委員会
- 諸岡 郁 1990「三重町の前方後円墳」『おおいた考古』第3集、大分県考古学会
- 諸岡 郁 1994「重政古墳出土の壺型埴輪について」『三重史談』11、三重史談会
- 諸岡 郁 1995「大分県三重町重政古墳の測量調査と採集埴輪について」『おおいた考古』第7集、大分県考古学会
- 諸岡 郁 1997『三重地区遺跡群発掘調査概報』Ⅱ、三重町教育委員会
- 諸岡 郁 2000「竜が鼻古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報』Ⅳ、三重町教育委員会
- 諸岡 郁 2002「道ノ上古墳」『三重地区遺跡群発掘調査概報』Ⅵ、三重町教育委員会
- 諸岡 郁 2018『陣箱遺跡（第3次調査区）』大分県豊後大野市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集、豊後大野市教育委員会
- 諸岡 郁・玉川剛司・田中裕介 2014「漆生古墳群（1次調査）」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』4、豊後大野市教育委員会
- 諸岡 郁・千原和己・田中裕介 2015「漆生古墳群（2次調査）」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5、豊後大野市教育委員会
- 諸岡 郁・井 大樹・安部和城・江口寛基・中島小春・田中裕介 2016「漆生古墳群（3・4次調査）」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6、豊後大野市教育委員会
- 諸岡 郁・大矢健太郎・中原彰久・村田仁志・田中裕介 2017「漆生古墳群（5次調査）」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』7、豊後大野市教育委員会
- 吉田和彦・平川信哉 2006『小熊山古墳発掘調査報告書』杵築市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集、杵築市教育委員会
- 若狭 徹 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
- 渡邊隆行 2018「豊後西部の動態—筑後川上流域（日田玖珠地域）の古墳時代初頭前後の集落と墓—」『集落と古墳の動態』Ⅰ、第21回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集、九州前方後円墳研究会

#### 挿図出典

- 図1：田中編1998報告書の第30図（坂本嘉弘原図に加筆）
- 図2：田中編1998報告書の第29図
- 図3：田中2009論文の図7
- 図4：諸岡ほか2017概報の図3（玉川剛司作成）および神田ほか1993報告の図3
- 図5：神田ほか1993報告（田中作成）
- 図6：田中作成
- 図7：後藤・吉田2014報告書の第139図
- 図8：田中編1998報告書の第6図
- 図9：諸岡編2018『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』8の第12図（玉川剛司原図に諸岡郁加筆）
- 図10：諸岡編2012『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』2の第7図（玉川剛司原図に諸岡郁加筆）
- 図11：玉川剛司作成
- 図12：諸岡2002の第3図（諸岡郁作成）
- 図13：玉川2015の第11図（玉川剛司作成）
- 図14：諸岡編2000『三重地区遺跡群発掘調査概報』Ⅳの第15図
- 図15：諸岡1997の第16図および玉永1987の第22・25・27図
- 図16：田中作成